

## 【論文】

## 「亀井壯介報告から見た蘇州・常熟の清郷」 — 「清郷」地区に関する報告（1943） —

愛知大学東亜同文書院大学記念センター長 三好 章

### はじめに

1939年、東亜同文書院が専門学校から大学に昇格しても、卒業に当たっての大旅行が学生にとって大きな意味を持っていたことは同様であった。そこに到る間、1931年の満洲事変は1935年の塘沽休戦協定によってひとまず解決したものの、国民政府の進める統一化が同年11月の幣制改革によって混乱状況であった通貨の統一に向けて進むことにより、南京政府が名実ともに中国を代表する政権となっていった。そして、幣制改革は「円元パー」によって「満洲国」との経済の一体化を進め、そこに中国を組み込もうとする日本の目論見を拒絶するものであった。こうした状況に対して、天津に司令部を置いていた日本の北支那方面軍は、義和団に関わる北京議定書に基づき北京近郊宛平県に駐屯していたが、そこにおいて宋哲元の29軍と対峙していた。そして、1937年7月7日に始まる日中全面戦争をきっかけに、当然のごとく書院生の卒業旅行に国民政府のビザなど出るはずもなくなり、それ以前に身柄の安全確保自体が困難になっていった。

こうしたことから、書院生による卒業大旅行は必然的に日本軍による占領地区あるいは統治地区、または日本軍の力を背景に成立した満洲国や蒙疆政権、また北京の臨時政府、華中の維新政府、日本軍の撤兵を条

件に出馬し、そして日本に裏切られた汪兆銘政権の統治地区に限定されていった。こうした地域の調査報告に、地域的広がりを求めること自体が無理である。しかし、対日協力政権や日中戦争期の中国社会、あるいは現在は中華人民共和国に組み込まれているものの、現在もなお地域の自立に向けた動きを内包する地域を踏査するなど、現在の中国を考える上で重要な視点や視角、あるいはその由来となる歴史的モメントを垣間見ることでもあるのではないだろうか。

本稿は、2019年に愛知大学東亜同文書院記念センターにおいて始まった「東亜同文書院調査報告書再読」プロジェクトの一環、かつ中間報告である。プロジェクトの中で本研究は主として、華中地域において「清郷」工作が展開された地域を卒業大旅行の対象地域として訪れた書院生による報告書<sup>①</sup>からうかがわれる華中社会、特に在地の農村における対日協力政権の実態を検討することを目的としている。本稿では、その中から第40期学部生亀井壯介の報告をとりあげ、汪兆銘による対日協力政権が統治していた華中農村の、特に地方政権の状況について検討してみたい。そこから、王朝権力以来の「お上」と「民」の関係を垣間見る事になろう。そしてそれは、伝統中国の農村に根ざし、やがて毛沢東によって清算されたとされる中国基層社会のあり方でもあった。

## 1. 「清郷」工作とは

筆者は先年『『清郷日報』記事目録』を出版した際<sup>2)</sup>、以下のように清郷工作について整理した。

1940年3月に、日本の支援によって南京に「還都」した汪兆銘国民政府<sup>3)</sup>は、その当初から統治地域の確実な掌握が問題となっていた。なぜなら、汪政権は日本軍の進攻によって確保した上海から南京にかけての中国の最も豊かな地域に地盤をおいていたとはいえ、そこは共産党軍である新四軍、国民党系の忠義救国軍、さらにさまざまな地方武装が豊かな農村地帯を自らの地盤として確保をねらい、活動を展開していたからである。汪政権が日本軍とともに清郷工作を実施しなければならなかった理由もそこにある。汪政権自身、1941年5月、「政府ノ威令、南京城ヲ出ツル能ハスト謂フモ過言ニ非ス」<sup>4)</sup>と、日本政府に対し状況の悪さを訴えていた。これは、当時の日本関係者も同様の見方をしており、「南京陥落以来四年目にして國民政府の建設強化、中支建設が初めてほんとの軌道に乗ったのである。この四年間はそれへの準備期間といふべく、この間におけるたびたびの政治的變化と不完全なる新政権の政治力のために、國民政府の威令は主要なる鐵道沿線、主要なる都市におよぶにすぎず、いはゆる點と線とを保持するにすぎなかった。『縣政不出城門』といふ句のしめす通り、新政府の政治力は城門を出でて新政府のもつて立つべき地盤たる郷鎮を把握して面的に支配するだけの實力を有しなかつた」<sup>5)</sup>と見られていたのである。さらに政権維持のためには確実な税収が必要であり、そのためには治安維持が不可欠

であったからである。また、汪政権が強化され統治地域を完全に掌握できるようになることは、汪兆銘引き出し工作で活動した影佐貞昭らにとってみれば、その時の汪との約束であった二年以内の日本軍撤兵を実現するためにも、不可欠な条件であった<sup>6)</sup>。

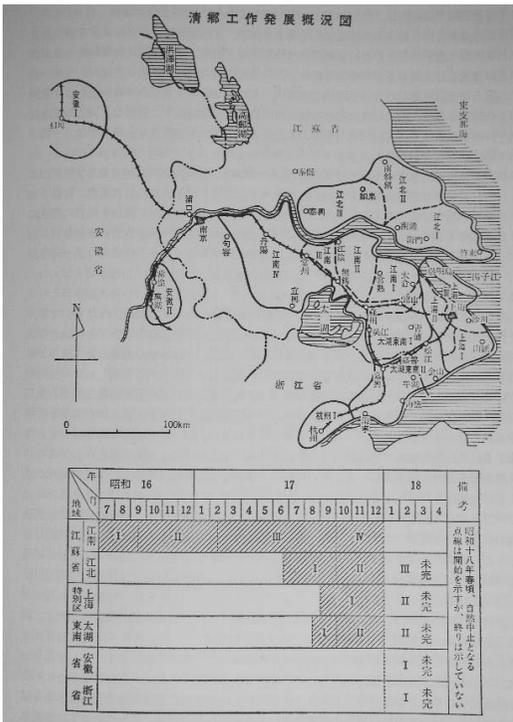
清郷工作の開始にあたって、その軍事行動の中核を担った日本軍中支派遣軍第十三軍司令官澤田茂中將は、日本側の指導理念について、次のように語っている<sup>7)</sup>。多少長くなるが、清郷工作実施側の意図を確認する上で重要であるので、引用しておく。

(長江下流域)三角地域の治安肅正は当軍の最も必要なる仕事なるも、従来の如き「一時的討伐」を以てしては地下深く潜入しつつある敵の組織を破壊する能はざるは明らかなり。……(汪政権)軍事顧問部春氣中佐主任となり研究の結果、嘗て蔣介石が江西省の赤化地域に対し行ひたる方法、即ち「軍事三分、政治七分」の方法により「清郷工作」を行ふを可とするの結論に到達せしを以て、……速かに清郷工作を実施するに決し、(1941年)七月一日より開始することとせり。

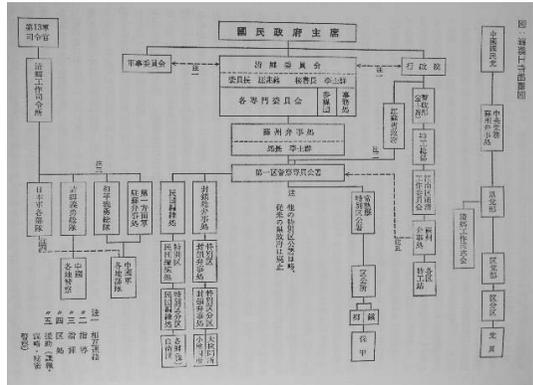
抑々本(清郷)工作……は軍事は日本軍統一担任、政治は國民政府担任と云ふ事に決定せり。蓋し本工作の主目的は、國民政府政治力の滲透にあり、此の工作を一手段として國民政府の力強き政治力を現出せしむるを要す。本工作の最大要点は、敵匪の掃除に非ずして其の後に於ける國民政府政治力

の滲透なり、発展なり。この政治の滲透不可能な ならば、国民政府を支持しての和平出現は不可能なり。……本工作に対する日本軍への要 望は、極めて簡単なり。「軍紀の厳正」之なり。従来往々にしてありし支那人輕侮を改め、之を友人として取り扱ひ、真に日支提携、新秩序の建設の第一歩を実現するに在り。之が ためには、日本が率先して聖戦を現実に行動に現はさざるべからず。軍紀の厳正、之なり。

このような目的と「精神」で始まった清郷工作は、少くとも 1941（昭和 16）年 7 月からの第 1 期、同年 9 月からの第 2 期、翌 1942 年 2 月からの第 3 期と言うように、地域と時期を区切りつつ、1945 年の日本敗戦まで継続された。



地図：清郷工作実施地域および進行表  
出所：『支那事変陸軍作戦〈3〉』420 頁



(図：清郷工作組織図)  
出所：『支那事変陸軍作戦〈3〉』417 頁

1943 年 9 月、清郷委員会主任李士群が暗殺されると<sup>(8)</sup>、清郷工作自体が次第に活動を緩め、惰性の中で繰り返されるようになるものの、1945 年 8 月まで杭州～上海～南京間の治安は大きく損なわれることはなかった。それは、戦後中国に残留していた日本人居留民を始め、中国に派遣されていた日本軍将兵、総計 200 万人が大きな混乱もなく、帰国できたことから、実証されるのではないだろうか<sup>(9)</sup>。1943 年夏には、蘇州百貨公司、すなわち蘇州大丸では「清郷 3 週年記念大廉売」と銘打ったバーゲンセールを行っている。状況証拠ではあるが、治安がそれなりに確保されていた証左であろう。

## 2. 書院生の蘇州行き

昭和 18 年 6 月 1 日、東亜同文書院 40 期生の学部 2 年亀井壯介は、上海の大学を離れ、蘇州に向けて列車で出発した<sup>(10)</sup>。常熟班として亀井とともに常熟を訪れたものは有野芳郎・西内寛隆・金海政秀・川崎宏太郎・木下勉であり<sup>(11)</sup>、そのうち有野・金海・川崎に関しては調査報告が残されている<sup>(12)</sup>。旅程の詳細は本稿末に資料としてあげた亀井自身が残したの「日誌」<sup>(13)</sup>（資料 1）に譲

るが、ここでその概略を見ておきたい。昭和18年、すなわち1943年は時期的にアッツ島の玉砕、山本五十六の国葬と、開戦初期の優勢はとうの昔に消し飛び、次第に戦局の悪化が誰の目にも明らかになってきた時期であった。

6月1日(火)午前7時20分、雨天の中を徐家匯の書院を出発し、午前10時25分発の列車に乗車、午後1時10分、ダイヤ通りに蘇州に到着した<sup>(14)</sup>。途中、崑山を過ぎると田植に勤しむ農村が見えた。また、出発に際して、書院の小竹文夫教授から汪政権軍兵士である「和平軍」兵士が満鉄関係者に暴行を加えた廉で銃殺されたとの話を聞いた。蘇州までは約70km、2時間半の列車の旅であった。到着後、直ちに蘇中駐屯部隊特務機関へ向かい、蘇州の実情に関して安藤大佐から3時間に渉って講義を受けた。ほとんどは清郷工作に関する物であった。その後、彼ら一行は下士官室に向かい、そこで宿泊することとなった。書院生の卒業旅行に関しては、この時期日本軍の保護が与えられていたが、その待遇は下士官相当であった。宿舎を確保した後、蘇州城外南にあった「大丸」蘇州店<sup>(15)</sup>にいた同文書院大学飛石初次<sup>(16)</sup>助教授を訪ねた。

翌2日(水)、軍用トラックに1時間ほど乗車して常熟へ向かい、到着後憲兵隊、県政府に挨拶、その後夜9時まで調査に関する打合せを行った。宿泊は常熟部隊内、「涼しくて良い」とある。下士官待遇であるから、兵よりは設備の整った宿舎で、長江に近いことから川風なども吹いていたのであろう。さらに3日午前は興亜院華中連絡部元連絡官森下氏から常熟全般の説明を聞き、「造詣の深きお話」で「得る所大」であった。その

日の午後には常熟県政府に県長王崑山、同秘書王新五を訪問、調査の挨拶をしている。

調査は4日(金)午後から本格的に始まった。亀井は興亜院華中連絡部蘇州事務所および常熟県政府において、行政関係の資料閲覧、書き写しに専念した。当時の資料が多くの場合散逸していることから考えると、後述するように亀井が筆写した資料(資料3)の意味は大きい。調査は6日(日)の休日を挟んで9日(火)午前中まで、連絡官室と県政府で行われた。午後、日本軍部隊に同行して<sup>(17)</sup>徒歩で滸浦口へ向かい、長江を直に見た。汪政権軍を訓練していた日本軍部隊長が歓迎してくれた。翌10日(水)、初めての「戎克」<sup>(18)</sup>に乗って清郷工作の実態を見学、「沿岸には竹矢来がぶらぶらっと続いてゐる」風景を見、長江に面した北新聞でクリークから上がり、近くの汪政権軍所在の王巷へ徒歩で向かった。王巷では日本軍部隊長の訓話を中国語<sup>(19)</sup>に通訳し、翌11日(木)滸浦より船でクリークを常熟に向かい、12日(金)区公所、鎮公所で資料閲覧、筆写を行った。13日(土)には上海に戻った。その後、16日(火)に青島へ船で向かい、その後列車で済南—北京—奉天と巡回したが、これは調査と言うより、華北・満洲周遊に近かった。

延べ13日間、2週間足らずの常熟調査であった。ほんの数年前の先輩たちと比べても短期間であり、「大旅行」とは言い難い規模であろう。しかしながら、次第に戦局が悪化するのを感じながらの「調査」旅行であり、最終期の書院生にとって、その規模とは関係なく、「卒業大旅行」ではあったにちがいない。

### 3. 亀井報告について

亀井壯介は、上述のように蘇州北方にある常熟県に赴き、その県政を中心に資料を閲覧し、調査報告している。報告書は「常熟県県政調査」と題され、200字詰め原稿用紙、すなわち「ペラ」と呼ばれた原稿用紙に手書き77枚である<sup>(20)</sup>。学部の卒業論文としては物足りないようにも見え、「駄文」と本人も述べるが<sup>(21)</sup>、「学徒出陣」を控え、学窓に別れを告げる覚悟で記したものであるだけに思いが残ることが感じられる。

さて、亀井による報告は汪兆銘政権が相対的にはまだ安定していた1943年<sup>(22)</sup>、その地方政権の実態を知る上で貴重な情報を残している。亀井の常熟県調査項目の詳細については本稿末にあげた資料2を参照されたい。報告では、常熟の人口など基本データを示した後、地政学的位置関係から「経済的に外国品が上海を介して入ってゐる。それは化粧品等にも見られる。……30年も此処に住んでみた外人もあり、スミット氏は無錫に学校、教会を有してゐたと言はれてゐる。……県城内を見れば、赤屋根の外国風の建築が多数存在してゐる事を知り得る」<sup>(23)</sup>と、自らの見聞をまじえて記しているが、皮相さは免れていない。踏査時間の短さの故であろうか。続いて、清郷工作については新四軍が地下工作を継続しているらしいこと、初期新四軍の活動であった江南抗日義勇軍の任天石<sup>(24)</sup>の来歴に触れるなど、必要なことは押さえている<sup>(25)</sup>。その上で常熟県の行政区域と行政組織、県政府の組織機構などについて記している。注目すべきは、地方行政が円滑に進まない地方が多い中で、常熟に関しては「地方経費の不足に依る人材の吸収難と言った事は常熟県には存してゐな

い。……新政治理念は相当徹底して居り、親日的雰囲気がよく……人材の素質は事変前のそれより低位ではあるが……大体三流所」と評価する<sup>(26)</sup>。亀井の評価の妥当性も含め、検討に値する内容ではある。ここでは、戦中期の書院生による「大旅行」報告書のなかにうかがえるものを確認することが目的であるので、その具体的検討の手始めとして、亀井報告のなかから常熟県政府の構成員表（資料3）を取り上げてみたい。

まず、県政府幹部クラスで（第1表）である。幹部クラス10人に特徴的なことは、東呉大学、復旦大学卒業者を含むその学歴の高さ、行政関連職の経験者ばかりであることであろう。年齢的には30代が5人、40代が2人、50代が3人と、かなり若手を中心とした構成となっている。在来の県政府の構成員については不詳であるが、日本による占領下、はじめから完全に行政組織を解体再構築することは考えにくい。しかし、亀井が調査したのは1943年であり、汪政権そのものも成立してまる4年が経過している。対日協力政権統治地区での業務経験者を行政と治安のトップに据え、政治運動としての東亜連盟運動にかかわるような教育、また清郷工作の実務関係、財務関係に30代の高学歴者を配している。ただ、教育局長程現<sup>(27)</sup>（<sup>(27)</sup>+秦）と、清郷区執行委員会主任委員張<sup>(28)</sup>（<sup>(28)</sup>+玉）が、いずれも袁殊の手配で県政府に配されている点である。周知のように袁殊は汪政権では教育文化部門のトップに就くが、共産党の地下黨員であった<sup>(27)</sup>。さらに詳細な検討が必要となるが、教育局長が職務熱心であればあるほど、戦後から考えるとその行動が疑われる。なお、幹部クラスには人物評価の欄があり、亀井が筆写

した情報は言わば部外秘に属するもの、本人の目に触れてはならない考科表に類する物であったと考えられる。亀井が実地に農村を見たのはほんの2、3日にすぎず、ほとんど県政府などで資料閲覧に費やしたのであるが、その成果は後世に報いられているとあって良いのではないだろうか。

次に県政府の職員(第2表)である。これだけでは総計11人の小さな所帯である。そのほとんどが常熟出身者で占められ、地元学校卒業者と近隣の大都市である南京、上海の学校卒業者がピックアップされた感が強い。職歴も地元行政実務者がほとんどである。その中に書記金印六が「前常熟禁煙局科員」と記されているのは目に付いた。禁煙局とはアヘンの取締部局であり、裏を返すとアヘン取引と関わり合いがあったとも考えられるからである。

亀井は、調査した常熟県第二区郷鎮長の一覧も載せている(第3表)。都合33人、その多くが初級中学以上であり、教育水準が元々高かった常熟<sup>(28)</sup>ならではの郷村リーダーといえる。しかも彼らは「地方公益をなす」「保長をなす」など地方有力者として「胥吏」と言いうる階層を形成していることが見て取れる。

その他、亀井が筆写した情報は、上にも述べたが恐らくは県政府などの行政檔案であり、人事考科表であった。彼が、常熟での部隊長の通訳等をしているところからは口語の中国語を一方向的に話すことは可能であったものの、現地語の聞き取りは不得手であったと判断せざるを得まい。しかし、書院生の一定の特権的立場が同じ日本人あるいは日本軍との親密な関係を持つものとして、当時の一般中国人の目に触れることのない

文献を閲覧することが出来たのではないだろうか。

## 小結

書院生の蘇州訪問は、現地でも報道されていた。蘇州に本社を置く『江蘇日報』には、亀井らに遅れて蘇州を訪問した書院生について「滬同文書院教授 学生を引率して蘇州に調査訪問」と題する記事が掲載されている<sup>(29)</sup>。それによれば、当時国際法担当の同文書院大学教授神谷龍雄に引率された書院生10名が、6月5日に蘇州に到り、外国租界、日本人居留民の生活、経済活動などを調査し、学生は蘇州城内の地方経済を調査研究している、とのことであった。また、雑纂扱いではあるが、清郷工作进行していた汪政権、実質的には李士群の新聞である『清郷新報』では「上海日本同文書院学生「柳田与平次」ら、蘇州地方の紅木の諸製品およびその生産と消費状況を研究するため、特に学生多数と共に蘇州を訪れ、実地研究を行った」<sup>(30)</sup>と報道している。これらの報道は、書院生の活動が現地の統治者、有力者には知られていたことを意味している。

亀井以外に同時期常熟に入った書院生の報告には、上にあげたように有野芳郎「支那家族制度」、金海政秀「常熟県集荷配給機構について」、川崎宏太郎「常熟県金融機関調査報告」がある。さらに、近接地域や時期の近いものも多数あり、今後それらを整理検討する予定である。

書院生の卒業大旅行は、書院創設期からその終焉まで、およそ半世紀にわたって継続的に行われた行事である。それは、同文書院の設立目的である実地の中国理解に基づく日中交流実務者養成に従ったものであり、

多くの人材を輩出してきた。しかし、日中間の不幸な関係悪化がそうした理解の深化を妨げ、卒業大旅行どころか書院の存続さえも不可能事としてしまったのである。今回検討したのは、そうした困難がきわまる時期にあって、可能な範囲での、すなわち日本の軍事力の及ぶ範囲での中国の民の世界に入り込もうとした若者の見聞である。当然ながら時代的制約は、卒業大旅行の開始当初よりも大きい。彼らの熱意を評価することは、本稿の目的ではない。研究において、努力は評価されてはならないからである。そうした見方からすると、亀井報告は一定の立場以上の日本人でなければ見ることのできなかつた内部資料を筆写し、現在に残した点に意味がある。現在の中国においても存在する「人事檔案」資料である。日中手を取りあって、蒋介石＝重慶政権や共産党と対峙しなければならないはずであるのに、

当の中国人スタッフに対して「機会があれば更迭すべし」というような人事考課を行うのは、汪政権を支えていたはずの日本側である。清郷工作において厳に戒めなければならぬとされていた日本側の理由のない優越意識が、中国人スタッフの目に見えないはずの部分で露骨に現れていたのであった。

書院史全体から見れば、日中戦争時期の評価は人に依って分かれるかも知れない。しかし、卒業大旅行の目的であった現地に即した調査研究の精神は息づいていたと言っても問題はないであろう。それゆえ、本稿で紹介した亀井壯介は自らの報告に忸怩たる思いを持つ誠実な学生であったのであり、必死に常熟県政府などで資料を筆写し続けたことに彼なりの満足感を得ていたのではないだろうか。

---

(1)1942年、1943年の卒業旅行報告集に大まかに目を通しただけでも、清郷工作に言及しているものは10本は下らない。すでに、本文でも触れたが、日中戦争が全面化する中、書院生の卒業旅行も日本軍統治下に限られたのは当然である。しかし、かえって制約を受けた事で日中戦争全面化の前には関心をひかなかつたであろう上海-南京間の農村社会などに目を向けたのである。それはまた、遠方に行く事に関心を向けてきた書院生にとっては大きな方向転換ではあっても、自らが生活する上海とその周辺に目を向け、じっくりと考察するきっかけとなつたのではないだろうか。本稿で取り上げた亀井壯介も、報告の最後に本文中にも指摘したが、学業を切り上げ戦地に赴かざるを得ない気持ちを、昂揚しているように記している。表面の勇み立つ気分とは裏腹に、内面へ屈折した思索が錯綜しているように思えた。

(2)拙編著『『清郷日報』記事目録』2005年3月、中国書店刊。

(3)汪政権に関する研究は近年対日協力政権としての位置付けが強まっており、単なる「傀儡政権」論にとどまるものがいまだあるものの、一面的理解でしかない。すなわち、武漢作戦以降の日本軍の攻勢、ヨーロッパ戦線における枢軸国の優勢など、大戦終結の形勢から数年前を振り返るような視角では本質を見誤る危険がある。汪兆銘工作に当たった影佐禎昭や今井貞夫らは、日本軍統局の姿勢として「二年以内の完全撤兵」を条件として交渉に当たっていたのであり、これが近衛声明や、近衛の内閣投げだしを経て反故にされるなど、交渉当事者たちには想定されていなかったし、重慶脱出後にそれを知った汪兆銘らにとって、それは青天の霹靂どころか、痴の沙汰であった（『今井回顧録』など。）

(4)『国民政府ノ日本政府ニ対スル要望書』昭和十六年五月(防衛庁戦史室『戦史叢書 支那事变陸軍作戦<3> 昭和十六年十二月まで』朝雲新聞社 昭和50年11月)414頁。

(5)石浜知行『清郷地区』中央公論社 昭和19年1月17頁。また、清郷工作に深く関わることになる当時汪政権軍事顧問部顧問の任に就いていた日本支那派遣軍所属陸軍中佐春氣慶胤は「還都の祝典が済んだ当時、汪兆銘政府が支配する土地は、日本軍の直接の援護による上海、南京など数個の重要都市にすぎなかった。そのほかはすべて、敵の手に委ね、首都南京の城門外にまで敵が出没した。たとえば、句容や丹陽など、南京のすぐ近くに共産軍が侵入し、その東の太湖の西方地区には重慶の抗日救国軍が堅固な地盤をつくって、日本軍を尻目に共産軍と相争っていた。……蘇州に近い常熟では、それぞれ三千以上の兵力をもつ重慶軍遊撃隊と共産軍が日夜戦闘し、このため、すぐその傍を走る汪兆銘政府の生命線たる南京—上海間の鉄道は連日爆破され、半身不随となっていた。」(晴氣慶胤『上海テロ工作76号』毎日新聞社 昭和55年4月 188~189頁)と回想する。

(6)このことに関し、影佐貞昭は「清郷工作の眼目は該地域民衆の安居楽業を期し該地域の政治、経済、軍事等凡てを支那側に委譲して該地域より日本の軍隊其の他の機関を撤去し以てこの地域に対する支那の政治的独立を期するを目的とする」(『曾走路我記』臼井勝美編『現代史資料第13巻 日中戦争5』みすず書房 1966年7月 388頁)と述べている。なお、「曾走路我記」の日付は昭和18年12月、「ニウプリテン島ラバウル」にてとあり、影佐が中国からラバウルに異動した後、「仍て唯脳裏に浮かべる儘を系統もなく秩序もなく口述し副官大庭春雄中尉に其筆記を依頼した」とある(同書349頁)。

(7)前掲『支那事变陸軍作戦<3>』415頁。同書では、これを澤田中将陣中日記より引用としている。なお、引用文は表現、仮名遣い、漢字などすべて同書のまま。

(8)前掲晴氣慶胤『上海テロ工作76号』188~222頁。ここでは「特務の末路」の章に「李士群毒殺される」が収められ、李士群の暗殺によって清郷工作も頓挫していく様子が描かれている。清郷工作自体も、戦後の回憶であるので留保を付けた解釈が必要とはなるが「竹矢来の中の楽土」と皮肉な書きようで記されている。なお、李士群は1941年5月に清郷委員会秘書長兼駐蘇弁事処主任となって清郷工作では中国側の中心となり、翌42年には江蘇省主席となった(王惠農「李士群と“76号”」全国政協文史資料委員会編『中華文史資料文庫』第16巻、中国文史出版社、116~123頁、Web版)。王惠農は無錫で商業に従事していたが日本による占領後、上海で李士群の知遇を得て特工総部警衛総隊副官主任となった(同前)。なお、『中華文史資料文庫』については、<http://www.szhgh.com/Article/wdsds/read/201412/70555.html>参照。

(9)拙稿「南京1945年8~9月：支那派遣軍から総連絡班へ」(『愛知大学国際問題研究所紀要』No.143、2014年3月、pp.55~76)参照。そこでは、支那派遣軍と重慶政権軍との戦後の「ノーサイド」状態について論じた。「満洲国」が解体され、ソ連による破壊略奪行為があった「東北」との大きな違いである。

(10)以下、亀井壯介の旅程とそこでの出来事に関しては前掲『東亜同文書院中国調査手稿叢刊』第75巻、pp.179~190による。他の同級生の日誌と応援に来た書院の教員や列車の時刻など、多少の出入りはあるがほぼ同内容であり、初期の作業として清郷をテーマに報告書を提出した亀井の日誌に依拠した。今後の資料の読み込みに従い、補充訂正を行いたい。

(11)亀井と同じ第75巻に日誌が収録されている。

(12)有野芳郎「支那家族制度」、金海政秀「常熟県集荷配給機構について」、川崎宏太郎「常熟県金融機関調査報告」であり、いずれも第 197 巻に収録されている。

(13)前掲中国国家図書館復刻版第 75 巻。

(14)日中戦争のほぼ全ての期間を通して、華中鉄道は特急天馬号をはじめ、普通列車に到るまでほぼダイヤ通りの運行を続けていた。これは、清郷工作がそれなりの成功を意味している。

(15)現地では「蘇州百貨公司」と称していたが、新聞広告などには「大丸」のロゴマークが使われ、従って日本人居民は「大丸」と呼んでいた。当然書院生もそう呼び記録していたと考えられる。

(16)飛石初次 (1914～?)、1939 年同文書院講師。ドイツ語、刑法担当。1941 年の『』では教授とある (加島「東亜同文書院大学教員と愛知大学教員の人事的側面における接合性—両者の学部開設時と開学時における教員層の検討を通して—」『同文書院記念報』VOL.24、2016 年 3 月、58 頁)。なお、大島隆雄『アジア・太平洋戦争下における東亜同文書院の変容—いわゆる「評価問題」と「止揚の諸契機」に着目して—』(『愛知大学史研究』第 2 号、2008 年、14 頁)が援用した昭和 18 年 5 月現在の「東亜同文書院大学教員業務分担表」によれば職位は助教授、担当科目は刑法および行政法、である。また、著書として『浙江司法状況視察報告司法行政を中心として』が東亜同文書院大学東亜研究部より 1943 年に刊行されている。亀井らを迎えた際の蘇州滞在は、この研究と関わりがある可能性がある。

(17)本人の日記には「軍とともに」とある。本人は同道してのつもりかもしれないが、実態としては学生の護衛に日本軍が付いていた、と見るべきであろう。

(18)「戎克」は海上輸送を中心に用いる船なので、勘違いしている可能性がある。

(19)亀井が用いた漢語は書院で学んだ「北京官話」であり、長江下流域、ましてや常熟の地域言語ではない。後掲の資料第 3 表からもわかるように、郷長、鎮長クラスは全て常熟出身であり、中国の中でも教育がかなり普及していた農村地域の常熟ではあっても、通訳した亀井の中国語を兵士が理解し得たとは考えにくい。

(20)前掲中国国家図書館復刻版、第 197 巻。

(21)亀井は、報告書の末尾に「於昭和十八年十月二十二日 端倪す可からざる状勢の下、臨時徴兵検査を前に脱稿す この駄文を以て学生生活より離せんことを痛み 且つ本然蹶起すあり。」と記している。本文中にも記したが、常熟調査を行っているときは、まだ「学徒出陣」は行われておらず、時局が急を告げる中、学生としての本分に勉めようとしていた姿がある。ところが、いざ執筆となるときに繰り上げ卒業となったわけで、無念さがうかがわれる。下に、その部分 (亀井報告書末尾) を掲げる。

(22)このころは、華北では前年からの飢饉で日本軍が中国住民に軍糧を供出したこともあり (劉震雲著劉燕子訳『温故一九四二 人間の条件 1942 —誰が中国の飢餓難民を救ったか—』集広社、2016 年 1 月。なお、中国版原著は 1993 年に出版され、2012 年に張国立主演で映画『一九四二』として中国で公開された。)、住民に食料を支給できなかったように国民党も疲弊していた。また、延安では「大生産運動」を展開し、「自力更生」が叫ばれたが、その模範とされた八路軍の南泥湾開墾も含め、困窮からの脱出を探ったからに外ならない。そうした困難を打開しようと、延安の毛沢東から、旧知の周仏海を通じて汪政権とのコンタクトを探る動きがあった (『周仏海日記』など)。

(23)亀井報告 3～4 頁。

(24)拙著『摩擦と合作 新四軍 1937～1941』愛知大学国際問題研究所叢書、創土社、2003年2月。

(25)亀井報告 5～6頁。

(26)亀井報告 13～16頁。

(27)岩井英一『回想の上海』（私家版）など。

(28)蛇足ながら、常熟は科举史上多くの合格者を輩出しており、1905年に廃止されるまでに、2000人以上の進士がいる（『常熟市志』）。

(29)「滬同文書院教授 率学生蒞蘇調査」（『江蘇日報』民国32年6月8日第2面）。『江蘇日報』は、汪政権江蘇省政府の所在地である蘇州で発行されていた一般紙。もちろん汪政権寄り、親日的な報道姿勢である。『江蘇日報』は民国30年10月10日創刊。すでに蘇州で刊行されていた『蘇州新報』の後継紙。『江蘇日報』創刊号第1面に「発刊詞」が掲載されており、「本紙が本日、新たな装いで読者諸兄の面前にまみえることができたのは、我々にとって非常な欣快とするところである！本紙の前身は『蘇州新報』であり、『蘇州新報』は3年余りの奮闘を通して、和平運動の発揚に相当な努力を尽くしてきた」とある。『蘇州新報』は民国28年9月23日刊行が第409号であり、日刊紙が滞りなく発行されていたと仮定すれば、民国27年、すなわち1938年7月始めに創刊されたと考えられる。報道姿勢は当初より親日的であったと考えられる。なお、『江蘇日報』は民国34年9月7日が最終刊であり、日本敗戦後のため、蔣介石支持に紙面が変わっている。

(30)『清郷新報』民国32年6月18日第4面、「瑣聞一束」。『清郷新報』は、清郷工作のために前年1941年6月に創刊された『清郷日報』の後継紙。執筆者などは、『清郷日報』とかなり重なっている。前掲拙編著『『清郷日報』記事目録』。

## 【資料 1】

旅行日誌：昭和 18 年度

・常熟班

学部 2 年 亀井壯介(第 75 卷 pp.179~190)

6 月 1 日雨天 出発

午前 7:20 学校発

午前 10:25 上海発の列車に乗車、蘇州へ

・小竹教授 和平軍兵士銃殺とのこと

・「満鉄の人」に暴行の由

・崑山を過ぎると、田植

午後 1:10 蘇州着 雨天

・部隊に向かう

午後 2:00~5:00 安藤大佐

・清郷工作に関する訓話

午後 6:00 下士官室へ、その後外出：下士官室に宿泊か？

・大丸に「飛石先生」訪問

6 月 2 日 午前 8:45 部隊出発、軍用トラック乗車

午前 10:00 常熟着

・憲兵隊、県庁にあいさつ訪問

午後 9:00 調査に関する打合せ

・宿泊：常熟部隊内、「涼しくて良い」

6 月 3 日 午前 9:00 頃より 連絡官室訪問

・旧連絡官森下氏より 3 時間の長時間説明

・全県全般の事情・・・「造詣の深きお話」「得る所大」

午後 県政府訪問

・県長王崑山氏に面会

・行政関係王新五氏に面会

夜 馬場君と「支那服」にて散歩、「老酒」にて気焰

6 月 4 日 曇天 午前中 飛石・齊伯教授と虞山にて遊ぶ、旧址訪問

午後 連絡部へ、「資料を写す」、その後齊伯教授と茶館で間(閑?)談

6 月 5 日 午前中 連絡部、県政府にて調査

・飛石教授、馬場、早瀬君と東門外に、民船にて城内へ

・故山本元帥国葬日、東門外に国旗(日の丸?)掲揚

・「宣伝部鍾氏の努力」

6 月 6 日 最初の晴天 鍾先生と興福寺へ、途中新公園へ

午後 2:00 帰隊、兵営より日本酒

6月7日 端午節 曇天

午前中 連絡官室、県政府で調査

夜 数野君と南門外で老酒、飛石先生とお別れ

・南門外で日本人が拳銃を突きつけられた事件あり、夜部隊出動

6月8日 大詔奉戴日

早朝 黙禱、宮城遙拝 連絡部へ

夜 数野君と散歩、常熟芝居を見る

6月9日 晴天 午前中 連絡部にて調査

午後 1:00 有志有野君、高瀬君、木下君と小生、軍とともに濬浦口へ

・今回旅行の圧巻

午後 5:30 クリークを伝い、濬浦口へ

・かつて塩密輸地として有名

・揚子江に臨み、「塩臭い」

・訓練部隊長、「我々の来た事を大いに喜んで下さった」

夜 部隊長と町を見学

・官舎に寝る

6月10日 晴天 午前 8:00 乗船、「戎克に始めて乗った」

・「沿岸には竹矢来がづらづらっと続いてゐる」

・北新閘へ、その後杜甫で王巷へ巡察

・和平軍に対し部隊長の通訳

夜 「田舎料理に花が咲く」

6月11日 晴天 早朝 5:30 北閘を起床（文章に乱れ）、一路濬浦へ向かう

午前 12:00 濬浦着

・土産に土産老布の支那服購入

午後 2:00 乗船、常熟へ

6月12日 曇天 「領事館の証明書の件にて明日常熟を去る」

・馬場兄と区公所、陳公所訪問、調査

6月13日 上海に帰る

6月14日 領事館に行く、青島行き準備

6月15日 上海にて浩然の気を養う

6月16日 午前 9:30 上海港出帆、北上

6月17日 曇天 午後 4:00 青島着

・散歩

・大阪外語同窓会支部に羽根田氏を訪問

6月18日 晴天 朝 青島神社など名書を回る

(以下、青島→(列車)→済南→(列車)→北京→(列車)→奉天→7.4 帰国)

## 【資料 2】

調査報告書：常熟県県政調査（197 卷 pp.263～353）

亀井壯介

昭和 18 年 6 月 1 日～15 日

県政調査項目

## 第一節

- 一. 全県又は特別区の位置、面積、総人口、人口密度地勢
- 二. 文化程度
- 三. 外国の影響度
- 四. 重慶及新四軍の曾ての影響並に反清郷工作の程度
- 五. 事変後の県政の沿革
- 六. 新国民運動の展開概況

## 第二節

- 一. 現行行政区域及区数
- 二. 威令圏の拡大経過

## 第三節

## 一. 県政府の機構

## (一) 内部組織

1. 既設内部組織系統表
2. 裁局改科の実施経過
3. 合署弁公制の準用状況
4. 設立籌備中のもの
5. 県政会議の開催度数

## (二) 附属機関

1. 既設各種委員会及び諸会団体の目的及組織
2. 設立籌備中のもの

## 二. 県政府の人的構成

## (一) 総説

1. 地方人材及地方経費の不足と人材吸収難状況
2. 新政治理念の普及と新人登庸状況
3. 現在の地方行政人員の素質と事変前の其との比較

## (二) 県政府構成者の分析

1. 県長又は署長、秘書、科長、局長につき次の事項を一覧表に作成
  - (イ) 氏名 (ロ) 本籍 (ハ) 年齢 (ニ) 学歴 (ホ) 職業経歴 (ヘ) 党派別
  - (ト) 思想動向 (チ) 対職務忠実度 (リ) 新政治理念の認識度
 特に県長に付き人格徳望識見統率力を記入
2. 科員、弁事員、書記及び此等と同等以上の県行政人員に付き次の事項を一覧

表に作成

- (イ) 氏名 (ロ) 本籍 (ハ) 年齢 (ニ) 学歴 (ホ) 職業経歴 (ヘ) 派閥
- (ト) 思想動向 (チ) 新政治理念の認識度

3. 県行政人員年齢別表
4. 県行政人員出身地別表
5. 県行政人員出身学校別表

(三) 任用

1. 高等又は普通考試及格者の氏名総数
2. 任用資格と官職との関係
3. 県長の任免手続
4. 任用と幕友制即ち官署の利党化
5. 県長、局科長の事務引継状況

(四) 待遇

1. 本俸、加成、公米又は米貼一覧表
2. 退職賜金の有無と程度
3. 県行政人員の生活費を調査しその給与の不足分を算出
4. 給与不足額の補填実況

三. 県政府の運営

- (一) 県長の県政統率概況
- (二) 官署の私営化傾向の程度
- (三) 行政能率調査の結果

能率低級なるときは其の主なる原因を列挙

- (四) 日本側の内面又は側面指導の影響

四. 県行政人員の訓練

(一) 訓練機関

1. 省又は弁事処立及び建立の常設及び臨時のもの
2. 訓練工作

(二) 受訓者の利用又は特典及び受訓中の給与

(三) 訓練実績

五. 県政府の附属機関の活動状況

六. 県連合協議会の有無若し之あるときは次の事項につき調査

- (一) 目的、(二) 招集手続、(三) 構成、(四) 既に召集したる回数、(五) 県党部との協力状況、(六) 民間各界代表の協力をに於ける熱意

第四節 区制

- 一. 各区公所の内部組織と附属機関の目的組織
- 二. 各区公所の人的構成

- 三. 各区公所の運営
- 四. 区行政人員の訓練
- 五. 区公所附属機関の活動状況
- 六. 区連合協議会の有無、若し之あるときは県連合協議会に準じて調査
- 七. 郷鎮長会議の運営状況

#### 第五節

- 一. 各区郷鎮保甲、人口、壯丁数一覧表を掲げて概説
- 二. 郷鎮公所の内部組織
- 三. 郷鎮長につき次の事項を調査す
  - (一) 郷鎮長の年齢、党籍、学歴、職業、執務能力、(二) 任用資格、任免手続、
  - (三) 待遇、(四) 郷鎮長の対保甲指導力
- 四. 郷鎮行政の運営と愛護村
- 五. 郷鎮長の訓練
- 六. 保長会議の運営状況
- 七. 保甲長の任用資格と任用手続との概況
- 八. 保甲弁公処の経費の調達
- 九. 保甲会議の運営状況
- 十. 保甲と自衛
  - (一) 従来の武装職業自衛団を改組し、警保連繫に抛り自警団又は警防団を組織しあるや、之あるときは組織訓練運営などにつき調査、(二) 連保連坐切結の適用あるや否や、(三) 自新戸の管理、(四) 検挙匪犯の協力、(五) 形跡可疑の人の潜入に関する報告及び其の他の情報の蒐集
- 十一. 戸口異同査報に依り次の調査を行ふ
  - (一) 帰来者の増加状況、(二) 出生死亡の差額状況
- 十二. 保甲の工作概況
  - (一) 隔絶幕構築と看視、(二) 公路橋梁水路の修築、(三) 愛路組織及其他の工役
- 十三. 保甲長の訓練
- 十四. 民衆訓練概況
  - 意見→対策

【資料3】「調査報告書：常熟県政調査」より、常熟県第二区中国人幹部職員等  
(亀井報告：県幹部一覧表)

1. 常熟県幹部一覧表

役職	氏名	本籍	年齢(歳)	所属政党	学歴	経歴	就職経緯	支那事変・大東亞戦争への従軍程度	職務忠実度	対日態度	好感情など	人格	徳望	政治的手段
1 県長	王鳳山	河北阜平	57	中国国民党	江蘇省警察伝習所卒業	南京省會警察庁科長 鎮江警察隊隊長 常熟県公安局長 常熟県警察所長 常熟特別区公署長	民国31年3月2月11日 常熟特別区公所改組に伴い、局長就任	高し	陣頭指揮、執務熱心	好感を有す	濃厚なり	温厚円満なり	民心第一し徳望高し	大胆にして又綿密周到なる着意あり、現職に置くを可とす
2 県警察局長	韓国珍	奉天瀋陽	47	無	保定警官学校卒業 奉天警官学校卒業	安徽省会司令部副官長 鎮江軍警處第二科科长 東省特別区衛拉爾廣濟別軍一面坡等処警察署長 延慶真警察局長 江蘇省會警察局長總務科科长	省警察局長警務大隊長より昇格	普通	熱意深し	普通	物に動じざる所あり	頗る厳格なり	頭腦に立派も感生あり行徳望あり	現職に置くを可とす
3 県教育局長	程理沙(7+衆)	江蘇常熟	33	中国国民党	復旦大学卒業	上海中学教員 正陽中学教員 常熟私立民徳中学教導主任並校董 常熟鐵道協会の副理事長 常熟日報總述主任	民國31年1月16日 表教庁長への命に依り就任	普通	良し	普通	表裏一致	表裏一致	表裏一致	表裏一致
4 中国国民党常熟縣区常務執行委員会主任委員	張ギン(金十五)	江蘇常熟	33	中国国民党	復旦大学卒業	復旦大学助教 復旦中学教導主任 清郷区東亞聯盟指導委員会委員	清郷後常熟遷充の際、 党務非算処長主任より 2月16日付の命令により 就任	高し	面的業務への熱意大なるも全部への積極性に乏しい	好感を有つ	普通なり	普通なり	普通なり	普通なり
5 常熟県郵政管理局所長	金新	江西豊城	37	中国国民党	江蘇省幹部訓練班卒業 中央軍校第九分校特別班卒業	江蘇省保安第一團上尉副官連長兼付 陸軍八十九軍少校団付營長 中央軍校軍官隊少校区隊長 郵政部特種警察訓練所中隊長 鎮江鐵路警察隊主任團長 蘇州段段長	民國31年6月 前任朱所長病氣により 辭職のため看對候管理 所長の命により就任	普通なり	態度十分と は言はれ難し	普通なり	普通なり	普通なり	普通なり	普通なり
6 常熟県縣稅務管理局所長	唐仁	南京	30	中央国民党	中央大学卒業	鎮江縣部警務課警務科員 郵政部特種警察隊警務科員 清郷特別区公署第一科科长 江蘇省財政廳任專員 大東亞地区清郷警察專員公署第一科科长	普通なり	熱意あり	普通なり	普通なり	普通なり	普通なり	普通なり	普通なり
7 秘書	王新五	北京	54		江蘇法政学校卒業	河北省有連軍事務總局科長 財政部巡警署主事 大同県總務科科长 常熟特別区公署秘書 常熟特別区公署第一科科长 常熟特別区公署第一科科长 常熟縣財政局職員 高郵縣嘉定區財政局局長 常熟縣政府第二科科长 常熟特別区公署第二科科长 鎮江巡警科員	普通なり	熱意あり	普通なり	普通なり	普通なり	普通なり	普通なり	普通なり
8 第一科科长	楊紹遇	常熟	47		江蘇公立南菁学校卒業	常熟特別区公署第一科科长 常熟特別区公署第一科科长 常熟縣財政局職員 高郵縣嘉定區財政局局長 常熟縣政府第二科科长 常熟特別区公署第二科科长 鎮江巡警科員	普通なり	熱意あり	普通なり	普通なり	普通なり	普通なり	普通なり	普通なり
9 第二科科长	錢伯蘭	常熟	54		常熟法政講習所卒業	常熟特別区公署第一科科长 常熟特別区公署第一科科长 常熟縣財政局職員 高郵縣嘉定區財政局局長 常熟縣政府第二科科长 常熟特別区公署第二科科长 鎮江巡警科員	普通なり	熱意あり	普通なり	普通なり	普通なり	普通なり	普通なり	普通なり
10 宣傳科長	張季如	江蘇	34			東亞聯盟南京中国總会幹事								

## 2. 科員等

	氏名	年齢	出身地	学歴	経歴
<b>科員</b>					
1	周起之	51	常熟	上海神州大学法学部卒業	常熟蘇州上海河南教育行政 司法職務 前常熟自治会会計科長 常熟県公署第二科科員
2	趙会誕	47	常熟	浙江省立法政専門学校法律 本科卒業	前常熟県政府第三科科員
3	孫靖夷	49	常熟	常熟鄉村師範卒業	前常熟自治会課員 常熟県公署公署県政府科員

<b>保甲副主任</b>					
1	孫建業	30	儀徵	南京文化学院卒業	儀徵県第四区区长

<b>事務員</b>					
1	陳韻和	44	常熟	初級中学卒業	前県政府書記及特別区公署 事務員
2	吳鴻魁	48	常熟	江蘇輿地測量隊卒業	崇明県測量員 常熟県公署 県政府助理工程員
3	劉国彦	27	河北東光	高等学校卒業	書記 科員

<b>書記</b>					
1	奚善安	53	常熟	常熟法政講習所卒業	常熟地方法院檢察庁書記員 兼理司法
					常熟県公署書記員 常熟県公署県政府特別区公 署書記
2	蔣元培	32	常熟	常熟民徳中学高中部卒業	常熟特別区公署書記
3	金印六	30	常熟	文化学院卒業	前常熟禁煙局科員

<b>農業指導員</b>					
1	錢棟孫	40	常熟	中法大学卒業	常熟県立農場助理員

3. 郷鎮長一覧：常熟県第二区郷鎮長姓名表（三十三年二月作成に依る）

	郷鎮別	郷鎮長姓名別	性別	年齢	本籍	学歴	経歴
1	梅北鎮	張洪興	男	45	常熟	高小卒業	地方公益をなす
2	聚沙郷	唐耀祖	〃	41	〃	〃	保長郷長代理をなす
3	赤烏郷	黄応南	〃	39	〃	初中卒業	地方公益をしてすこぶる成績あり
4	師徳郷	喬暢懐	〃	38	〃	高小卒業	現在商会理事長
5	竹絲郷	金杏生	〃	36	〃	初中中途退学	保長をなす
6	留下郷	曹信孚	〃	41	〃	初中卒業	〃
7	師橋郷	徐祖蔭	〃	38	〃	高小卒業	地方公益をなす
8	大才(水+土)橋	呉復初	〃	39	〃	高中卒業	郷長をやる
9	湧金郷	蕭佩玉	〃	42	〃	初中卒業	地方公益をやる
10	趙市郷	任慶成	〃	37	〃	〃	〃
11	洞堰郷	趙啓元	〃	30	〃	〃	〃
12	圩港郷	陸永夫	〃	37	〃	〃	催徴吏たり
13	周行郷	任炳年	〃	30	〃	初中卒業	地方公益
14	塘口郷	章受伯	〃	43	〃	高中卒業	郷長をやる
15	塘橋郷	毛鵬華	〃	40	〃	高小中退	地方公益
16	虹橋郷	蔡軼夫	〃	28	〃	高中卒業	浦東中学教員
17	聚泉鎮	沈雲ナ (口+男=喃)	〃	30	〃	高小卒業	郷公所事務員
18	古段郷	曹寅臣	〃	46	〃	〃	郷長をやる
19	寨角郷	呂心誠	〃	41	〃	〃	〃
20	珍門郷	陳善衍	〃	55	〃	高中卒業	浙江省地方法院録事
21	万善郷	陳国華	〃	35	〃	高小卒業	初小教員
22	萬柳郷	馮玉書	〃	43	〃	〃	郷長をやる
23	洵沙郷	高仰水	〃	47	〃	高中卒業	初小教員
24	王市鎮	黄人端	〃	43	〃	高小卒業	耿涇区助理をやる
25	南陽郷	汪東元	〃	40	〃	初小卒業	地方公益
26	曇花郷	劉旭初	〃	43	〃	〃	菓業執委及保長
27	シヨク(足+鳥)城郷	陶星璐	〃	30	〃	高小卒業	地方公益
28	龍墩郷	陶星	〃	33	〃	初中卒業	耿涇区長第二区副区長
29	万花郷	張国慶	〃	44	〃	初小卒業	地方公益
30	鄧市郷	顧増元	〃	35	〃	高小卒業	初小教員
31	福堡鎮	丁寿康	〃	36	〃	初中卒業	教職員をやる
32	武安郷	沈信長	〃	46	〃	高中卒業	地方公益
33	カン(艸+佳)浦郷	周宝シ (深の彡が玉)	〃	41	〃	〃	郷長をやる